



壁面に植物のアート

東京・南青山にあるカフェ&バー「CNAC WALL」の写真上。右のカウンター前と屋外テラスにある植物の壁は、植物学者のパトリック・フラン氏がデザインした。1953年、パリ生まれのフラン氏は、12歳から試行錯誤を続け、18歳までに「垂直庭園」とも呼ばれる壁面緑化システムを発明。世界中からオファーがある人気の植物アーティストだ。

植えつけられた植物は、カウンター前に59種、屋外テラスに54種。自然光に近い照明と、毎日2回、水が供給されるシステムになっている。

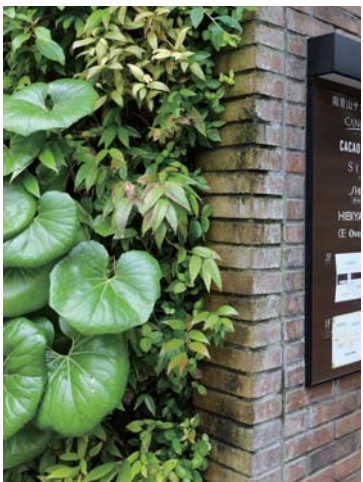
店内には、植物のデザイン図と植物名のリストが置いてある。屋内は、セブリナ、コウモリラン、プテリス、タマシダ、クッカバラ、スパティフィラム、アンズリウム、アジアンタム、カラジウムなど亜熱帯の植物が多く、屋外は、オニヤブソテツ(オニ

「ボタニカル」をテーマにしたファッションやプロダクトが続々生まれている。目の疲労回復など、心のサブリともいわれる花や緑。都会では、壁面に生い茂る植物を鑑賞しながら、ワインやコーヒーを楽しむ人たちが増えている。



右の写真は、代々木ヴィレッジのレストラン「ニエミ」。左は南青山のレストラン「HATAKE」の店内。壁に植えたり、根を出したまま吊したり、植物アートはより斬新に





シダ、ガクアジサイ、ヤツデ、ツワブキ、ヒトツバなど東京でも生育するものが選ばれている。いずれも八丈島では見慣れた植物で、島の緑が、改めて宝物のように見えてくる。

クールに 垂直の庭

産業と人口の7割が都市に集中する日本。人々が気持ちよく過ごすことができる魅力的な街にするためには、そこに自然があるのが望ましいが、緑地を確保したくても高密度の市街地には土地がない。屋上や壁面を緑化するしかないのが実情だ。

ヒートアイランド現象の緩和や屋内への断熱効果を得られる壁面緑化。それを芸術作品として取り入れ、循環型社会を生み出す都市を再生しよう――。05年に愛知県で開かれた愛・地球博には、そんな期待を込めて巨大緑化壁「バイオラング」が展示された。実行委員会の監修で発行された書籍『呼吸する緑の壁―バイオラング』（マルチ出版）は「垂直

の森、垂直の庭は、果たして人々に受け入れられ、認知してもらえるか」と問いかける。

同書に掲載されている「バイオラングの明日を語る」という座談会で、愛・地球博会場演出総合プロデューサーをつとめた造園家の涌井雅之さんが「心配されたのは、植物が重力ストレスにどれくらい耐えられるかということだったが、我々の想像以上に適応能力があることもわかった。垂直であっても、それを克服する力がある」と語っている。

あれから10年。垂直の庭は都市の中で少しずつ増殖してきた。軽くする、防水をする、排水をする、サポートをする、という見えない技術も進歩している。

他の生物と同様に呼吸している植物だが、昼間は光合成で酸素を排出する。猛暑の夏、近くを通ると、ひんやりとした清涼感を味わえる。

上の写真は、南青山の集合店舗の建物。季節ごとに演出されて表情を変える植物たちが路地を彩り、町歩きがより楽しくなる。八丈島のどこにでも自生するツワブキも多数使われている。



表参道の駐車場で見かけた、これから伸びていく緑（アイビー類）の壁